

## 故 正野重方教授の御逝去を悼む

過去4半世紀の間わが国の気象界で指導的役割をつとめてこられた正野重方教授の計報は、日本気象学会員一同にとって大きな衝撃であった。心から哀悼の意を表する。正野教授は数年来運動神経の障害を來す病気に悩んでおられたが、夫人の献身的な御看護の甲斐もなく、1969年10月27日に逝去された。最終的病名は敗血症であった。享年57才。まだ大いに活躍していただきたかったのに、誠に遺憾なことである。

正野（以下敬称を省く）は1911年12月12日大阪に生れ、旧制大阪高校を経て、東京帝国大学理学部物理学科を1934年に卒業、中央気象台に勤務した。地震波伝播の理論的研究により1939年には理学博士の学位を受けた。その後正野の興味は気象台にうつり、恩師藤原先生ゆづりの渦度という概念が正野の頭腦の中で渦をまきはじめたのは日支事変の終り頃からであったと思う。正野は自分の考えていることを人に話さずにはおれない性分で、そのころ気象台の廊下で、あるいは駿ヶ台辺を歩きながら、あるいは喫茶店でコーヒーをのみながら眼をかがやかせてその研究の内容を語ってくれた正野の印象は、30年を経た今でもはっきりと私の脳裡にある。この頃が正野が研究者として一番充実した時期であったと思う。その成果は「大気擾乱の研究」という表題のもとに1940年から1948年にかけて気象雑誌に発表された12篇の論文にまとめられている。正野の着想は、上層大気の擾乱を渦度の移動としてとらえようとしたものであり、新しい気象力学の芽生えがこれらの論文のなかに読みとられる。

ただ正野の論文は日本語で書かれていたことと、時期が第二次大戦をはさむ頃であったために、これらの論文が広く世界の研究者には読まれなかつたのは残念である。その頃日本の外にあっても、Rossbyが正野と同様の意味で渦度の重要性に気付いていた。そしてそこから出発する新しい気象力学の発展は、戦争の打撃が少なく、研究者層の厚いRossbyを中心とする一派によって主として進められたことは止むを得ぬ成行であった。しかし正野の仕事は戦後の日本の若い研究者の道しるべとなり、現在のわが国の気象学の発展につながるのである。正野のこの業績に対し1950年に学士院賞が授与された。

1944年正野は藤原咲平教授のあとをついで東京大学の気象学講座の担当者となり、また当時気象研究所の理論気象第一研究室長をも兼任した。これは正野にとっても東京大学にとっても気象研究所にとっても幸いなことであった。それは、優れた研究者であると共に、その蔵するものを周囲に分ち与えねばすまぬ彼の性格は、彼が天成の教育者でもあったことを意味するからである。現在気象界で、日本のみならず世界の第一線で多数の正野の弟子が活躍していることは正野が優れた教育者であったことを証拠立てている。

東大へ移って以来正野の興味は台風の発生、発達の問題に向けられ、この分野でも多くの論文を発表した。台風発生論は今では正野の論文をのりこえて、ちがった形をとりつつあるが、この分野で現在多くの優れた研究が正野の弟子達によってなされていることは、正野の影響力の大きさを物語っている。正野はまた早くから数値予報の将来性に着目し、東京数値予報研究グループを組織して、わが国における

89  
78  
67  
56  
45  
34  
23  
12  
44

67  
57

るこの方面的研究の促進に努力した。その一環として数値予報に関する国際シンポジウムを開くことを企画し、それが実を結んで、1960年東京で盛大に開催されたとき、正野の喜びは一方ならぬものがあった。

1960年代になると正野の興味は雲物理の方面に向けられた。正野は従来の静的な雲物理学から一步進んで、雲物理学と力学との関連をつけたいと考えたのである。彼はこの分野においても人工降雨研究グループを編成して、種まきによって個々の雲が如何なる変化を受けるかを観測することを企てた。この計画はある程度達成されたが、この分野での彼の努力は病のため中断されたのは惜しいことである。

正野は日本気象学会に対しては、1948年より60年までは理事として、60年より65年までは理事長として尽し、1969年には名誉会員におされた。また既に1962年にアメリカ気象学会の名誉会員に推せんされた。さらに国際的にはWMOのAdvisory CommitteeおよびIAMAP/IUGGの委員として活躍した。

正野は生粋の研究者であった。彼の関心はいつも気象学に向けられており、大学の管理運営とか、政治の問題には強い興味を示したことはなかった。性格的には明るく、陽気、派出好き、無邪気な半面、気が弱く、淋しがりやの面もあった。友人や弟子達を招待して一緒に飲みかつ話すのが大好きであった。趣味としてある時期はパチンコにこり、ある時期にはダンスにこったが、頭脳を使う娯楽は好きでなかった。今ならばきっとボウリングにこったと思われるが、もう少し早くからボウリングが流行していたら彼の健康にもよかったろうというのが私共友人仲間の縁言である。友情には極めて厚く、彼を訪ねる度に嬉しそうな顔をして、「よう」といって迎えてくれた彼の姿は一生私の記憶から消えないであろう。

日本気象学会理事長 山本義一